

(二) フランクフルト大学での研究集会参加について

立教大学文学部は、ドイツ・フランクフルト大学との協定に基づき、これまで主に交換留学制度を通じて交流を図ってきた。今後、学術面の交流もいっそう深めたいという同大学 M・キンスキ教授からのお招きがあり、水谷隆之・鈴木彰の両名は、二〇一五年十一月二十六日・二十七日に開催された研究集会“Tokugawa Meeting Frankfurt 2015”に参加をさせていただいた。プログラムは以下の通りである。

Tokugawa Meeting Frankfurt 2015

“Early Modern Japan Approaches, Projects, Perspectives

Towards an International Association for Tokugawa Studies”

日時：二〇一五年十一月二十六日(木) 十時～十八時三十分

二十七日(金) 十時～十八時

場所：(第一日) フランクフルト大学 Neue Mensa building

Konferenzraum III’

(第二日) フランクフルト市立工芸美術館

第一日

Peter Kornicki (University of Cambridge)

: On manuscript culture

Michael Kinski (Universität Frankfurt)

: On Kaiho Seiryō as a “Thinker”

1st Session

Richard Bowring (University of Cambridge)

: On Hirata Atsutane

Mark Teeuwen (University of Oslo)

: Osaka 1828: the “Keihan krishtian” incident

Susan Burns (University of Chicago)

: On medical knowledge and Nanayama Jundo, a village doctor

“Positioning the Field: Studies of Early Modern Japan” Moderators:

David Mervart (Universidad Autónoma de Madrid) & David

Howell (Harvard University)

第二日

MAK Program, 1st part

A masterpiece of the Voretzsch Collection, Nara ehon

Suzuki Akira (立教大学)

: On Nara-ehon and their illustrations (in Japanese)

Mizutani Takayuki (立教大学)

: On Kana zōshi, Ukiyo zōshi and their illustrations (in Japanese)

MAK Program, 2nd part

2nd Session

Doreen Müller (University of London, SOAS)

: On the representation of filial piety

Andrew Gerstle (University of London, SOAS)

: On male male relations in shunga

Laura Moretti (University of Cambridge)

: On Edo period literature

実際の各報告は、事前に配布された右のプログラムに示されて

いたテーマの大枠を絞り込んだものであった。

“Tokugawa Meeting”は、主にヨーロッパに拠点を置く江戸時代研究者が集う研究集会で、開催は今回で四回目。思想・歴史・美術・文学といった多領域の研究者が一堂に会して、研究発表を中心に意見交換する場として運営されていた。使用言語は英語。今回はヨーロッパ各地とアメリカ・日本からの参加者があった。

キンスキー氏の開会挨拶の後、P・コルニツキ氏とキンスキー氏の基調報告、そして各報告と続いた。一報告の持ち時間は六十

分で、報告自体は三〜四十分、残り
は質疑応答という形式であった。二日間を通して、活発な質疑応答がなされたことは印象的であった。第一日の最後には、この会の今後のありかたとも関わる、ヨーロッパにおける江戸時代研究のありかたについて討論が行われた。日本における関連研究との距離など

について多様な意見が出されていたが、ふだん日本語で成果発表をしている身として考えさせられることが少なからずあった。

第二日は会場をフランクフルト市立工芸美術館に移し、キュレーターのS・シューレンブルグ氏のご協力のもと、第一部は同館蔵の奈良絵本（フォレット・コレクション）をテーマにして、資料展観とイエッセ氏（フランクフルト大学講師）による資料解説講演が行われた。その際、新出資料として江戸から長崎までの路程図（題なし。箱貼紙に「東海道五十三次絵巻物」とあり。個人蔵）が特別公開され、大きな関心を呼んだ。このあと、鈴木が世界各地に伝来している奈良絵本の比較研究の意義について、水谷氏が近世の『伊勢物語』の読み方を物語絵から問うことの可能性と意義について報告した。

二日間を通じて、欧米における日本研究の現在を体験する非常に貴重な機会となった。キンスキー氏には、研究会開催に先立つ二日にわたって、同大学図書館・江戸文庫、また市立工芸美術館の奈良絵本の閲覧について格別のご配慮を賜った。ドイツ・フランクフルト大学における日本研究の環境（の一端）に直接触れたこの経験を、今後の学術交流や留学生指導に活かしていきたいと考えている。

末筆ながら、キンスキー氏をはじめとするフランクフルト大学関係各位に心より感謝申しあげる。また、準備段階で、現在フランクフルト大学から立教大学大学院日本文学専攻に留学中のMorgaine Setzerさんから大きな協力を得たことを申し添え、感謝の意を表したい。

（文責 鈴木 彰）